小鳥だったのに

坂田火魯志

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト
http://pdfnovels.net/

注意事項

このＰＤＦファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にＰＤＦ化させたものです。
この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのＰＤＦファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】
小鳥だったのに

【Ｎコード】
Ｎ５９４１Ｕ

【作者名】
坂田火魯志

【あらすじ】
子供ができてから子供べったりになった妻。あれだけ可憐だったのにそれも。けれどそれでも。結婚して子供ができたら女の人は変わるけれど、というお話です。

第一章

小鳥だったのに

菅生愛生は菅生和彦の妻だ。

背が高くすらりとした身体をしている。脚は長い。切れ長であるが縦にも広めの流線型の目をしていて高めのやや大きい鼻である。肌は白く髪は短めでしかも細く縮れ気味である。

その彼女がだ。遂になのだった。

「あのね、今日ね」

「病院に行ってきたとか？」

甘い声が特徴の妻にこう返す。愛生も大きいが和彦はその妻よりまだ数センチ高い。黒い剛毛を短く刈り若々しい明るい顔をしている。眉は短めで濃い。耳がやや大きく鼻だちが整っている。

その彼がだ。こう妻に返したのだった。

「それ？」

「えっ、何でわかったの？」

「いや、何となくだけれど」

所謂感性でわかったというのだ。

「それでだけれど」

「そうだったの」

「それで妊娠した」

「うん、そうなの」

妻の言葉を先読みしての言葉が続く。

「三ヶ月なの」

「そうか、遂になんだな」

その言葉を聞いてだ。和彦は明るい笑顔になる。そうしてだった。

妻にだ。あらためてこう言うのであった。

「父親になるんだな」

「そうね、私もそれで」

「母親になるんだな」
「よかったね」
愛生はにこりと笑って和彦に告げた。
「私達これで親になるんだよ」
「そうだよな。親か」
「私お母さんになるんだ」
愛生の言葉がここで変わった。
「凄いよね、何か」
「ついこの前結婚したと思ったのにな」
三年前である。時間は少し経っているがそれでも二人は今はこう感じたのだった。
それでだ。それから一年。愛生は無事男の子を出産した。和彦と同じ顔をしたその子の名前はだ。
「豊彦かあ」
「いい名前よね。これでいいよね」
愛生が決めた名前だった。ほぼ彼女一人でだ。
出産の為入院している病室でだ。その子供を横に見ながら笑顔で話すのだった。
「だからこれにしようって」
「決めたんだ」
「男の子ってわかった時から決めてたの」
こう夫に話すのだった。
「だって私」
「だって？」
「お母さんだから」
それでだというのだ。にこりと笑って話すのだった。
「だからなの」
「それでなんだ」
「そう。この子の名前それでいいよね」
一応夫に聞きはする。既に決めていてもだ。

「豊彦で」
「ああ、いいよ」
和彦はその自分と同じ顔の我が子を見ながら答えた。
「それで。ただ」
「ただ？」
「もう決めてたんだ」
彼はそのことにだ。今一つ釈然としないものを感じていた。実は生まれてから二人でじっくりと話して決めようと思っていた。それがなのだった。
妻は何時の間にか一人で決めていた。そのことについてなのだ。
「そうなんだ」
「だって私お母さんだから」
「わかったよ。だからだよね」
「そうなの。じゃあ豊彦ちゃん」
もう我が子をそう呼ぶのだった。生まれて間もない我が子をだ。
「これから宜しくね」
ここから愛生は完全に我が子にべったりになった。何につけても我が子第一で可愛がり傍にいるのだった。ある日のことである。

第二章

風呂からあがった和彦はだ。トランクス一枚で妻のところに来て尋ねた。
「なあ、俺のシャツ知らないか？」
「あっ、そこにあるから」
箪笥を指差しての言葉だ。息子に自分の胸で乳を与えている。あまり大きいとは言えなかった胸も今はそれなり以上に大きくなっている。
「そこにね」
「そこにって」
「自分で取ってね」
こう夫に言うのだった。
「今豊彦ちゃんにおっぱいあげてるから」
「ああ、わかった」
一応頷く夫だった。しかしだ。彼はここでまたこう思うのだった。
「子供が生まれるまでは手渡してくれたのにな」
少し呟いた。しかし妻には聞こえない。我が子に集中していた。
そんなことが続いた。食事もだ。
「えっ、俺の朝御飯は？」
「はい、だからこれよ」
妻がにこりと笑って出してきたのはだ。バナナだけであった。
「これなの」
「バナナか」
「朝の果物って身体にいいじゃない」
「それは知っているけれどな」
それでもだとだ。まだ寝惚けている顔で妻に言うのだった。
「バナナだけが」
「ミルクもあるけれど」

「牛乳じゃないのか」
「そうよ。豊彦ちゃんも飲むし」
「ミルクか」
和彦は困った顔で言った。
「それはなあ」
「嫌？美味しいよ」
「いや、嫌いじゃないけれどさ」
実は牛乳も子供用のミルクも対して変わりがないと思っている。
それでもだった。
「全部豊彦だよな、最近」
「えっ、だって私達の子供じゃない」
素っ頓狂な声で返す愛生だった。
「じゃあ当たり前じゃない？」
「うん、それはそうだけれど」
「そうそう。それでだけれどね」
愛生は夫の言葉に構わずこう言ってきたのだった。
「今日のお仕事の帰りだけれど」
「ああ、帰りに？」
「おむつ買ってきて」
こう言ってきたのである。
「御願いね」
「おむつ！？」
「そう、おむつ」
また夫に告げた。
「おむつ少なくなってきたのよ。だから」
「そっちが買えないか？」
「ちょっと無理なの」
妻は困った顔になって夫に返した。その間もずっと豊彦を抱いている。
「今日病院に行かないといけないし。それに」

「それに？」
「実家からお母さんが来るの」
こう言うのである。
「お母さんにね。豊彦ちゃん見せないといけないから」
「買い物の時間はないのか」
「そうなの。行きたいけれど」
実は彼女が行っている病院はスーパーとは反対側にあるのだ。だからスーパーに行くには時間がかかるのである。それでなのだ。尚愛生は今は車を乗らないようにしている。豊彦がもう少し大きくなって安定してからだというのだ。ここでも我が子であった。
「だからね。今日は」
「ああ、わかったよ」
和彦も遂に頷いた。
「それじゃあな」
「うん、御願いね」
こうしてだった。彼は夫婦水いらずの関係から完全に我が子第一の状況になった。それで暗くなることが多くなった。それを見てだ。

第三章

職場の課長がだ。こう彼に声をかけてきたのだ。
「悩んでるかい？最近」
「ええ、実は」
実際にそれがすぐにわかる顔で頷く和彦だった。二人は今休憩所で紙コップのコーヒーを飲んでいる。そうしながら席に二人並んで座って話をしているのだ。
「そうなんです」
「息子さんができたんだよな」
「できたからなんです」
それでだとだ。正直に述べるのだった。彼にとって課長は腹を割って話せる信頼できる上司だ。そうした意味で実にいい上司である。
「それでなんです」
「ああ、奥さんが息子さんにつきっきりなんだね」
「わかりますか」
「うちもそうだからな」
課長は笑いながら言うのだった。黒縁眼鏡が実によく似合う中年の男だ。
「四人もいてなあ」
「四人ですか」
「最初の子ができてからそうなんだよ」
「そうなんですか？」
「これまで夫婦水いらずがもう子供第一になって」
そうだというのだ。
「今やあれだよ。俺なんてな」
「脇役ですか」
「そうだよ。家族の中じゃ脇役だよ」
こう笑って話す課長だった。

「何しろ女の子が四人だしねえ」
「えっ、全部女の子ですか」
「そうだよ。四人だよ」
課長は笑顔のまま和彦に話していく。
「御婿さんを迎えるのが大変だな、こりゃ」
「壮絶ですね、それはまた」
「稲尾監督みたいだよ」
かつての西鉄の大投手であった人物だ。その西鉄やロッテで監督をしていたのだ。人格もよかったことで知られている人物だ。彼の家は女の子四人であったのだ。
「凄いことだよね」
「凄過ぎますね、それは」
「けれど。それでもだよ」
「それでも？」
「女房は絶対に旦那のことを忘れないから」
こう和彦に言ってきた。ミルクコーヒーを飲みながらだ。
「安心していいさ」
「そうなんですか」
「俺のトランクスも服もいつも奇麗に洗ってくれて」
まずは洗濯から話す課長だった。
「御小遣いも奮発してくれるしな」
「あの、それは」
普通ではないかと言おうとした和彦だった。しかしここで課長は彼が言う前にこう言ってきたのである。
「普通なんじゃ」
「いやいや、その普通の中に愛があるんだよ」
今度はこの言葉であった。
「愛がね」
「愛ですか」
「それがわかるよ。女房は絶対に。何があっても」

「旦那を忘れないんですね」
「それはすぐにわかるよ」
課長の太陽の如き明るい言葉が続く。
「君もね」
「だったらいいんですけれど」
「子はかすがい。けれど旦那は」
「旦那は？」
「米だよ」
それだというのだ。
「ほら、米五郎左っていうだろ」
「ああ、織田信長の家臣だった」
「丹羽長秀な。旦那はあれなんだよ」
織田信長の重臣の一人だ。政に戦に何かと縁の下で力を発揮しておダ政権を支えた。夫とはそうした存在であるというのである。
「まさにな」
「そういうものなんですか」
「女房は信長だ」
一聴だけでは随分と過激な表現である。

第四章

「そして旦那は五郎左だからな。信長は彼を絶対に忘れなかったんだ」
「あの、普通逆では？」
和彦はすぐに課長の言葉に突っ込みを入れた。
「旦那が信長で女房が」
「それもすぐにわかる」
また笑顔で言う課長だった。
「安心するんだ」
「ううん、そうですかね」
「女房は最初小鳥だと思って結婚してな」
課長は今度はこんなことを言った。
「ところがこれが鶏だった」
「ええ、今実際にそう思ってます」
言われてみればその通りである。まさに雌鶏だったのだ。
「本当に」
「ところがずっと小鳥でもあるからな」
「そういうものですかね」
「それもわかるからな。楽しみにしておくんだ」
「楽しみにですか」
「そうしたことがわかる時をな」
課長は余裕そのものの態度で言っていく。そして。
遂にだ。こう言いきってみせたのだった。
「結婚・・・・・これはいいものだ！」
「ガンダムじゃないですか」
「けれどその通りだからな」
和彦の突っ込みに平然と返し続ける。
「それは」

「いいものですか」
「そうだ。だからすぐにわかる」
課長の言葉は変わらない。
「その時を楽しみにしておくといい」
「ううん、そうなったらいいんですけれど」
和彦はいぶかしむ顔で述べた。
「そうなれば」
「そうなる。だから楽しみにしておくんだな」
最後の最後までこう言う課長だった。だが和彦は課長の言葉は今回だけは信じられなかった。しかしある日のことであった。
家に帰るとだ。いきなり。
「あっ、待ってたのよ」
出迎えてきた愛生がだ。満面の笑顔で言ってきたのだった。
「おかえりなさい」
「待っていたって？」
「だって今日あなたの誕生日じゃない」
「あっ、そうだったのか」
言われてそのことを思い出した彼だった。
「今日だったのか」
「だからすぐに中に入って」
妻は夫を急かしてきた。
「一緒に食べよう」
「一緒にって」
「まずは着替えてね」
ここでも急かしてくる妻だった。
「それからね」
「ああ、わかったよ」
といあえず頷く彼だった。そうして玄関からあがって寝室の箪笥を開ける。その時妻もその着替えを手伝う。実はこれはいつものことだ。

そうしてだ。いつも食事を食べている席に向かうとだ。そこにあったのは。
「これは」
「どう？全部私が作ったの」
妻は満面の笑顔で夫に言ってきた。そこにあったのは若布とレタス、それにミニトマトのサラダにティーボーンステーキ、コーンポタージュスープ、ジャガイモのパイにオイルサーディン、どれも彼の好きなものばかりだった。
それを見てだ。和彦は驚いた顔で妻に尋ねた。
「これ、本当に全部御前が」
「ええ、そうよ」
また答える妻だった。
「時間かかったけれどね」
「豊彦は？」
「今は寝てるの」
席の横にある子供用のベッドに顔を向ける。するとそこに我が子が寝ていた。実に気持ちよさそうな顔ですやすやと眠っている。

第五章

「だから今はね」
「僕達だけか」
「遠慮なく食べて」
妻は夫にこうも言ってきた。
「あなたの誕生日だから」
「忘れてなかったんだな」
和彦は自分の席に座りながら愛生に述べた。
「僕の誕生日」
「そんなの忘れる筈ないじゃない」
これが妻の返答だった。
「私あなたの奥さんだから。そんなことはないわよ」
「ないんだ」
「絶対にないから」
こう言うのである。
「夫婦でしょ、私達」
「だからか」
「そうよ。それでね」
愛生は彼の向かい側の席に座っている。いつもの席だ。そうして向かい合っている夫に対してだ。今度はこう言ってきた。
「これからもね。何かあればね」
「何かあれば？」
「こうしてお祝いしようね」
「ああ、そうだな」
和彦も妻のその言葉にだ。笑顔で頷くのだった。
これはこの時だけではなかった。何かあればいつもだった。愛生は和彦の為に何かをしてくれた。彼はこのことを課長に話した。
話をする場所は同じだ。休憩所で紙コップのコーヒーを飲みなが

らだ。彼に話すのだった。
「ほらな、言った通りだろ」
課長はどうだ、といった顔で彼に言ってきた。
「俺の言った通りだろ」
「ええ、そうですね」
和彦はコーヒーを飲みながら彼の言葉に頷いた。この時も横に二人座ってだ。そのうえで話をしているのである。
「まさかって思いましたけれど」
「女房は確かに子供が大事さ」
それは揺ぎ無い事実だというのだ。
「けれどそれでもな」
「それでもですね」
「旦那のことは絶対に忘れないんだよ」
そうだというのである。
「そういうものなんだよ」
「ですね。雌鶏ですけれど」
「小鳥でもあるんだよ」
その二つが一緒になっているというのだ。
「そういうものなんだよ」
「そうですね。確かに息子にべったりですけれど」
「旦那も忘れないからな」
「ですね。それが本当にわかりました」
穏やかで、そして満ち足りた笑顔で課長に話す。

第六章

「それもよく」
「そうだろ。俺なんてな」
「課長は？」
「一家の中で男は俺だけだ」
妻と娘四人ならだ。それは当然だった。
「だから余計にだよ」
「奥さんがですか」
「何かあるとしてくれるんだよ」
そうだというのである。
「いやあ、それが嬉しくてな」
「ですね。結婚って本当に」
「いいものだな」
「そう思います」
満ち足りた笑顔はそのままだった。
「してよかったです」
「そうだろ。息子さんは元気か」
「元気過ぎる位ですね」
少しだけ苦笑いを入れて述べた。
「それで困ってます」
「ははは、それ位がいいんだよ」
「子供はですか」
「子供は元気が第一だ」
人生の先輩としてだ。確かな言葉だった。
「そうでないと不安で仕方がないからな」
「そうですね。それは」
和彦は課長のその言葉にも頷いた。そしてだ。
表情を暖かいものにさせてだ。課長に今度はこう言ったのである。

「それでですね」
「ああ、どうしたんだ？」
「二人目ができました」
言うのはこのことだった。
「二ヶ月です」
「おお、今度はそれか」
「はい、今度は女の子ですかね」
「そうかもな。まあ男の子か女の子かどっちから」
課長は笑って和彦に話した。
「どっちかしかないからな」
「ですね。それは」
「どっちでも楽しみだろ」
「ええ。女房も息子と俺の面倒を見ながら楽しみで仕方がないって感じです」
「子供は多ければ多いだけいいからな」
少なくともだ。この課長にとって少子化は関係ないことらしい。それが言葉になって出ている。
「だからな」
「ええ、二人目もできましたし」
「もっと幸せになるんだ」
課長はコーヒーを片手に和彦に告げた。
「いいな、今以上にな」
「ええ、家族で」
「そうだ。君も奥さんだけじゃないから」
「女房だけじゃないですね、本当に」
「お子さん達も大事でな」
「ええ、そうですね」
和彦は課長の言葉に確かな顔で頷いた。そうして言うのだった。
「そうしていきます」６
「頑張るんだぞ」

笑顔で告げた課長だった。こうしてだった。
和彦と愛生は夫婦で、そして子供達と共に幸せに生きていった。
その中で愛生は彼にとっては何時までも可愛く奇麗な小鳥だった。
母親になってもだ。それを感じ取ることができたのである。

小鳥だったのに　　完

２０１１・１・２６

ＰＤＦ小説ネット発足にあたって

ＰＤＦ小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は２００７年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にＰＤＦ形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのＰＤＦ小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能（たんのう）してください。

この小説の詳細については以下のＵＲＬをご覧ください。
http://ncode.syosetu.com/n5941u/

小鳥だったのに

2011年7月4日03時11分発行